



大学で突き抜ける!

専修大学の キャリア形成支援

専修大学には学生がなりたい自分を見つけ、そこに向かってしっかりと進んでいけるよう、学生たちに気づきを与える様々な仕掛けが用意されています。その一つがキャリアデザインセンターの「問題解決型チャレンジプログラム」です。今回の特集では、このプログラムに参加した学生たちに集ってもらい、キャリアデザインセンター・インターンシップオフィス長の田島真弓商学部教授も交えて、約8カ月間にわたり同じチームで問題（課題）に取り組んだ経験を語っていただきました。

ネットワーク情報学部
ネットワーク情報学科3年
松田 遼さん
新潟県出身。学部ではデータサイエンスを学んでいる。2年次からダンスサークルに入り、ダンスを覚え始めた。

文学部
英語英米文学科4年
鈴木菜央香さん
東京都出身。専修大学附属高校卒。上村ゼミで異文化コミュニケーションを学ぶ。サークルは専修大学国際交流会 SHIP 所属。

国際コミュニケーション学部
日本語学科4年
野澤慎之助さん
茨城県出身。山下ゼミで日本語学・国語教育を学ぶ。趣味はアルバイト代を貯めて買ったマイカーでのドライブ。

キャリアデザインセンター・
インターンシップオフィス長
田島真弓商学部教授
国立台北大学などで教鞭をとった後、2019年に帰国し専修大学の教員に。専門はマーケティング。



↑神田10号館15階グローバルフロアにて

専修大学に入学した 目的と現状

—まず皆さんは、どのような目的で大学へ入学し、現在大学で何を学んでいるのでしょうか。

松田遼（以下、松田）：私はデータサイエンスに興味があり、ネットワーク情報学部に入學しました。現在はデータサイエンスコースで学んでいます。データ分析は、その前段階としてデータ処理や整形などを行わなくてはならなくて、地道な作業の積み重ねです。大変な作業だと感じる一方で、データを分析しそこから考察することの面白さも感じています。

鈴木：私は、附属校の出身ですが、大学進学の際は、将来やりたいことが決まっていなかったため、英語を学んでおけば、その後いろいろな方面で活かせると思って、文学部英語英米文学科に進學しました。

野澤：私は元々教員を目指して大学に入學しました。大学では、教職課程に限らずいろいろ学びたいと思っています。日本語学科のゼミでは、中学校国語の学習指導要領を日本語学的視点から読み解くというようなことをしています。

—思い描いていたような大学生活を送れていますか？

野澤：1年次はコロナ禍でほとんどがオンライン授業でした。大学にも

行けず、サークルにも入らず、一人暮らしを始めたものの、友達との電話で孤独を紛らすような生活で、何もせぬまま時間だけが過ぎてしまったような1年でした。そこで、行動することの大切さを実感しました。2年次からようやく大学生らしい生活になったように思います。

鈴木：私も1年生のときはコロナの影響が大きかったです。2年生になって対面授業が多くなってから、大学とサークルが一気に動き出したように感じています。そこからはあつという間でした。対面授業でのグループワークも増えて、それが忙しい半面、楽しくも感じています。

松田：私は対面授業が再開された年の入学ですが、それでも一人暮らしを始めて最初のひと月は、みんなマスクしていて顔もわからないし、友達もできないし…地獄でした（笑）。大学は、自分から行動しなければ、何も得られない場所だと思っています。そんな思いもあつて、2年になってからですがサークルにも入りました。

田島：私が担当するゼミでも、コロナの時期は学生のメンタルが不安定で、ちょっとしたことで争いも起き、ケアが大変でした。ゼミを対面でできるようになると学生もイキイキしてきたように感じました。私も学生と会って話すと落ち着くし、学生も落ち着く、そのことをコロナ禍で再認識しました。「自ら行動を起こすのが大事」という話が出ましたが、自主性は大学で最も重要なことです。それを学べるか否かで、その後の人生も大きく変わると思います。

問題解決型チャレンジ プログラムに参加して

—ここにいる皆さんは、昨年5月から12月にかけて、問題解決型チャレンジプログラムに参



司会

キャリア形成支援課

松田耕平さん

キャリアコンサルタント(国家資格)

問題解決型チャレンジプログラムの流れ

5月からのスタートで、まずは3回にわたる講義でチーム活動の心構え、主体性、論理思考、批判思考などを学び、その後、3～8人のチームで担当する企業の問題に取り組むことになる。企業との密な打ち合わせ、キャリアデザインセンター職員への進捗報告などを行いながら進める。そして、12月に開催される成果発表会では、自分たちのチームがどのようなことに取り組み、どんな成果を出したのかを、企業や大学関係者、学生を前に発表する。



↑昨年12月、ソフトコミュニケーションズ株式会社にて、クライアント5社を前に行ったプレゼンテーション

加し、同じチームで企業の抱える問題に取り組みました。どのようなことを行ったのかご紹介いただけますか。

鈴木：私たちのチームは、Web制作を請け負うソフトコミュニケーションズ株式会社から提示された問題に取り組みました。具体的にはより魅力的な新卒採用サイトを考えるということです。最終的にはクライアント5社が参加する会議で私たちの提案をプレゼンし（写真）、高い評価をいただくことができました。

松田：売り手市場の中で、どんなサイトが学生の心に刺さるのか、「大学生の視点」で考えてほしいという要望でした。自分たちが考えたサイトがどう捉えられるのか、学生へのアンケート調査も行い、データ分析した結果も提示しました。

野澤：私たちの提案は、まだ実際の形にはなっていませんが、今後、どう企業のサイトに反映されていくのかを見守っているところです。

——大変だったことはありましたか。

松田：問題解決型チャレンジプログラムは、12月に学内で成果発表会が開かれ、チームごとに活動内容を発表します。そのスライド作りが大変でした。一度完成させたものの納得いくものではなかったため、3日前の段階でほぼ全部を

作り直しました。毎晩夜中2時過ぎまで、みんなでオンライン通話で議論して進めました。大変だった半面、楽しくもありました（他2名もうなずく）。

鈴木：作業だけでなく、就活の悩みなど無駄話もして、遅い時間になってしまいました（笑）。あと大変だったのは、アンケート調査です。多くの人が集まる鳳祭でアンケート調査のチラシを配りました。これも大変でしたが、やっていた楽しかったです。

野澤：企業の担当者や大学の先生方とのメールのやりとりは、とても勉強になりました。先生方にはゼミ生へのアンケート協力をメールで依頼したのですが、相手によっては何回もメールのやりとりをする必要がありました。結果的に、そこで多くのアンケートを回収できました。

どのようにチームワークを築き上げたのか

——チーム内の役割分担は、どのように決めたのですか。

鈴木：それぞれがやれることをやっていったら自然に役割ができていました。発表担当はリーダーの長村真也さん（法2）、メールでのやりと

※長村真也さんはドイツに留学中のため、この座談会に参加していません。

りや事務作業は野澤さん、アンケートのデータ分析は松田さん、そして私はスライド作成と、それぞれの強みを生かして作業していました。企業の方からは、チーム4人にそれぞれのキャラクターがあるねって言われました。

野澤：誰か一人でも欠けたら成り立たなかったチームだと思います。

松田：「積極的にやろう」というのを、チームの決め事としてはじめに決めたのがよかったと思います。

——プログラムには各自で目標を掲げて取り組んでいただきましたが、目標は達成できましたか。

野澤：私は元々周りに流されやすいタイプで、それじゃいけないと思ってこのプログラムに参加しました。議事録の作成、対外的なメールのやりとりなど、自分から取り組むように心がけることで、目標としていた主体性を育めたと思います。

鈴木：私は自分の意見をきちんと言える能力のアップを目標に掲げていました。リーダーの長村さんは1年生ながら自分の意見をしっかり言えて、そういう姿に学ぶことが多かったです。

松田：鈴木さんは最初のうち、チームでの打ち合わせではすごくいい意見を言うのに、それを企業の方の前では控えてしまうことがありましたね。

鈴木：企業に対してこんなこと言ったら、学生が何言ってるんだって思われちゃうかなって考えてしまって…。でも、最後は外でも意見を言えるようになったので、成長したと思います。

松田：私は、IT企業の理解とプレゼン能力を磨くことを目標に掲げました。企業で打ち合わせをする機会も多く、そこでIT企業の仕事を見ることもできました。また、このプロジェクトをきっかけに現在、ソフトコミュニケーションズでアルバイトをしていて、アシスタントとしていろいろ経験させていただいています。

田島：キャリアデザインセンターでは学生が無理なく自主性を培えるようにサポートしています。問題解決型チャレンジプログラムを通して、自分の学んでいることが社会でどんなインパクトを持つのかという理解にもつながります。皆

さんの話を聞いて、学業と社会を繋ぐというプログラムの目的が果たされていると感じました。

——皆さん、このプログラムのことはいつ知って、なぜ参加しようと思ったのですか。

松田：春のオリエンテーションでこのプログラムのことが紹介され、興味があったIT業界に関われそうだったので参加しました。

鈴木：私は、前年に参加した友人から話を聞いていました。チームで問題に取り組むということにチャレンジしてみたかったので参加しました。

野澤：3年次の初めの就職ガイダンスで知りました。就活をするにあたって、自分にはこれといった学生時代に力を入れたこと（ガクチカ）がなかったので、そうしたことにつながると思ったのと、自己分析の役にも立つと思って参加しました。実際に自分の強みも弱みも改めて把握できましたし、プログラムの経験は、就活でガクチカのネタとしても使っています（笑）。

この経験を将来に どう生かすか

——プログラムで得た経験を、将来にどう繋げていきたいと思いますか。どのような将来を思い描き、それに向けて今後取り組みたいことはありますか。



松田：プログラムを通して改めて自分はグループワークが好きだと感じました。だからこそ将来は、与えられた課題をこなすのではなく、何が問題なのか深掘りして、みんなで行動していけるような仕事に就きたいです。そんな社会人は楽しいだろうというビジョンが見えたので、このプログラムに参加してよかったです。

鈴木：きちんと人に意見を伝えることは、それまでの自分には難しいことでした。でも、みんなの助けもあって、抵抗感は少なくなりました。プログラムでは、自分のアイデアが形になっていく過程を経験することができました。将来は、何か提案をして取り組めるようなことを仕事にしたいです。

野澤：僕はプログラムを通じて、チームワークの大切さをすごく感じました。何においてもチームワークがないと社会は回らないということを実感しています。今は民間企業への就職を考えていますが、「チームワーク」を仕事選びの軸の一つに考えています。

田嶋：皆さん、プログラムを通して、チームビルディングを学べたようですね。学生のうちにここまで極めることができたのはすごい財産になると思います。チームを作ることは日本人の一番の強みだと思います。海外ではスタンドプレーによってパフォーマンスを上げる人も多いですが、日本人は相手の状況を見ながらチームを回すのが上手です。皆さんは今後、海外で活

躍されることもあると思いますが、ここで学んだチームビルディングは、世界に出ても素晴らしい強みになると思います。

野澤：プログラムで実感したのは、チームとして一つの結論を出すのは難しい面があるけれど、チームだからこそ自分にはない考えも取り入れられるということでした。

田嶋：チームでは、いろんな人の考えが集まるシナジー効果により、大きな問題へのソリューションを生むことがありますね。

鈴木：私はマイナス思考になりがちですが、チームメイトがそんなことないと励ましてくれ、客観的に自分を見られるようになったのがよかったですと思っています。

田嶋：自分一人ではネガティブになってしまうところを、周りがモチベーションを上げてくれて、より高みに行けるということですね。チームの素晴らしいところですよ。

松田：学部も学年も違う人が集まって活動しましたが、バックグラウンドが違うからこそ多様な意見が集まった。新鮮で楽しい経験でした。

田嶋：グローバル化が進み、ダイバーシティ、インクルーシブという考え方が広がり、多様化する社会の中で、自分と同じバックグラウンドの人ばかりと仕事をするわけではありません。学年も学部も考え方も違う中、それを乗り越えて取り組まれたのは、すごいことだと思います。

学生を大きく成長させる、手ごたえ十分の課外講座 キャリアデザイン PBL プログラム

キャリアデザインセンターでは学生が社会との接点を持ち、自らの将来を考え、どのような仕事に就きたいのかという気づきを得るために、問題解決型チャレンジプログラムなどの PBL プログラムを開講している。長期間にわたりチームで課題に取り組むもので、手応え十分なプログラムだ。

■問題解決型チャレンジプログラム

社会や企業などが抱える問題にチームで主体的に取り組み、問題の解決策を提案する長期の就業体験プログラム。授業で学んだ知識を実践的・総合的に活かすことができる。

■専大ベンチャービジネスプログラム

ビジネスモデルを競うコンテストと、コンテスト出場に向けてビジネスプランを作成する長期受講型プログラムで、アントレプレナーシップ（起業家精神）を養成する。